

第36回生物医学図書館員研究会参加報告

天野いづみ*

日本赤十字社医療センター図書室

I. はじめに

第36回生物医学図書館員研究会（以下「研究会」）は「次世代OPAC（Next Generation Catalog）」をテーマに開催された。今まで図書館の所蔵資料をベースに行っていた図書館サービスは、インターネットの登場により図書館所蔵以外の情報・資料も対象となった。それらの情報をまとめて検索可能な最新のシステムとして、「次世代OPAC」は、北米に始まり、世界的な広がりを見せている。国内でも図書館員の一部では注目されているが、広く周知される状況には至っていない。また、疑問も多く、価格面も考えると導入は前途多難であると思われる。その疑問を少しでもクリアにするために研究会は、基調講演、事例報告、そして会場と講師とのディスカッションというプログラム構成で開催された。基調講演、事例報告の内容の紹介とOPAC導入検討中の図書館員の立場で感じた疑問、提供される機能、性能、コストパフォーマンス等の報告をする。

II. プログラム

開催日時：2009年9月12日（土）14：00－17：00

場 所：順天堂大学6号館2階

テ ー マ：図書館はOPACを超えられるか？－新しい情報ツールがもたらすもの－

基調講演：「次世代OPAC」について考える

田辺浩介（慶應義塾大学・東洋大学非常勤講師）

事例報告：

1. Littel Navigator（リッテルナビゲーター）
－ Wikipediaと図書館情報資源のマッシュアップ
清田陽司（東京大学情報基盤センター助教授）
2. Primo（プリモ）のご紹介
平野 覚（ユサコ株式会社）

3. AquaBrowser（アクアブラウザー）－利用者が図書館資源のすべてを有効に活用するために－

松下 茂（株式会社サンメディア）

参 加 者：研究会 41名、懇親会 27名

III. 基調講演「『次世代OPAC』について考える」

講師の田辺氏は、日本の図書館関係者の手による新しい図書館システム「Project Next-L Enju」の製作を担当し、2006年11月からは同システムをオープンソフトウェアとして公開を行っている。「次世代OPAC」とは何かについて、岡本氏の言葉を引用し、「図書館の業務システムとしてライブラリアン目線で作られたものではなく、情報の探索システムとしてユーザー目線で作られたものだ。そして、それはもうOPACと呼ばれないものになっている。」¹⁾と紹介した。

一般に「次世代OPAC」では、従来のOPACが持っていた「基本情報・詳細表示」に追加して以下の機能が追加されている。

1. 「スペルチェック」
間違いスペルを訂正
“もしかして〇〇ですか？”
2. 「サジェスト機能」
関連語、関連サイトを提示



*Izumi AMANO：ヘルスサイエンス情報専門員（上級）
〒150-8935 東京都渋谷区広尾4丁目1-22. Tel.03-3400-1311(代)
Fax.03-3400-0136 jrclib@wind.ocn.ne.jp (2009年10月6日 受理)

3. 「ファセット型ブラウジング機能」

二次的絞り込みの候補メニュー表示
“日本語〇件、英語〇件”

4. 「ソート機能」

絞り込み結果を並べ替える

5. 「利用者参加型機能」

著者が自分でタグ、レビューを書き込む

6. 「RSS機能」

更新情報通知機能

7. 「統合検索機能」

複数のデータベースを統合する

現在国内で販売されている製品には、「AquaBrowser (Serials Solutions社)」「Encore (Innovative社)」「Endeca (Endeca Technology社)」「Primo (Ex Libris社)」があり、またオープンソースとして、日本では「Project Next-L Enju」、海外では「Koha」「VuFind」「Scriblio」「Kochief」等が公開されている。

また田辺氏は、情報を食材に置き換えて「次世代OPAC」を解析した。利用者と図書館員、それぞれのコミュニティがあり、またそのコミュニティから生まれそこで必要となる学内のデータ（機関リポジトリ、e-ラーニングシステム等）、図書館の業務のためのデータ（書誌データ、レファレンス事例集、勉強会資料、人的ネットワーク等）が食材となる。それらの食材を図書館員が手間をかけて利用者に提供するか（肉食）、手間をかけず図書館外部のサービス製品（Google、Wikipedia）で済ませるか（肉食）、既存のデータやサービスを組み合わせで新しいものを作って提供するか（中食）。「次世代OPAC」とは、まさに中食にあたると思われる。

では、なぜ料理をつくる（手間をかける）のだろう？中食である「次世代OPAC」は、幾つもの素材（惣菜）の組み合わせによる構成が可能であり、多くのバリエーションを持っている。よって各図書館においては、食べてくれる＝使ってくれる利用者の（潜在的なものを含め）ニーズを確実に捉える必要があり、ニーズに合わせて素材を加工し、最適化した「次世代OPAC」の開発、提供を求められる。また、全体としては、公開された共通のレシピにより、大きな厨房で効率よく調理し、大きなレストランで提供することが今後重要となることが説明された。

IV. 事例報告「Littel Navigator」

「次世代OPAC」として図書館情報資源やWeb情報資源を対象データとして捉えた場合、キーワードだけを頼りに情報を探るのは力不足である。それを補うために、

現在日本語をターゲットとして入力されたキーワードの機能を拡張し、必要な情報を探り当てるために開発されシステムがLittel Navigatorである。

Littel Navigatorはキーワードから以下のような情報をキーワードの機能拡張に利用している。

1. 分類法、件名標目表

図書館情報資源は、書誌分類法（NDC：日本十進分類法・NDLC：国立国会図書館分類法等）により明確に階層化されている。また、件名標目表では件名の間で関連付けが行われている。

そのような専門家により組織化された分類や件名を、検索の際に入力されたキーワードに生かすことで関連する項目や、上位概念、下位概念を含む資料を提示することが可能となる。

2. Wikipediaの活用

上述の分類表、件名標目表から得られる見出し語は限られており、利用者が入力したキーワードとマッチングする確率が低いため、Wikipediaに着目した経緯とLittel Navigatorにおける有用性、活用例について清田氏が以下のように解説した。

Wikipediaは日本語60万項目以上（2009年7月8日現在）、英語は300万項目（2009年8月17日現在）という膨大な項目が登録され、更に各登録項目には関連項目等が記述されている。これらWikipediaで使用されている用語を収集・分析し、分類表や件名標目表だけでは不十分な用語数を補うことで、Littel Navigatorのキーワード展開能力が格段に改善した。

V. 事例報告「Primoのご紹介」

Ex Libris社が販売しているPrimoは、全世界で180機関以上が導入しており、「次世代OPAC」と同様、分散している学内資源（OPAC、リポジトリ、デジタルアーカイブ、Contents Management System：CMS）と学外資源（電子ジャーナル、データベース、一般に利用されているウェブサイト、他図書館の情報）を取りまとめて、検索・提供ができるシステムである。PrimoはこれまでのOPACにWeb2.0的機能（ファセット、クラスタリング、タグ、レビュー等）を加え、更に、検索結果から利用者を関連情報資源やサービスに誘導するといった利用者をフォローする機能が搭載されている。この点がこれまでのOPACと異なる点だと思われる。

導入事例として、韓国のYonsei University Libraryで



図1. Primo : Yonsei University Library
(<http://library.yonsei.ac.kr/main/main.do> [accessed 2009-09-21])

の利用紹介があった(図1)。

個々の電子ジャーナルとのリンク以外, Primoとの連携が可能なリゾルバは, SFX (Ex Libris 社) に限定される。インターフェースと検索エンジンは UTF-8 に対応している。日本語対応は, 日本語解析による検索語の分割や検索結果のソート, 検索インデックスの作成等が 2010 年 3 月までに対応が完了する予定であり, おそらく同種の製品の中では最も早い。

基本的に Primo は導入機関にサーバー設置が必要であるが, それにより図書館がローカル資源情報(OPAC や機関リポジトリ等)を取り込む際のデータ転送において, データ量が多くても時間がかからずスムーズに行えるメリットがある。しかし海外においては, サーバー設置を必要としない Primo Direct の提供も開始されている。

そして「次世代 OPAC」の更に次の機能として Primo Central があげられる。「次世代 OPAC」は, 検索対象の情報データを取り込むが, データベースベンダー, アグリゲーター, 出版社の所有する情報データを図書館が取り込むことは許可されていない。このような場合の検索は, これまでどおり複数のサーチエンジンを横断的に検索するメタサーチツールを利用するしか方法はないが, Primo Central はこれを解決する。

Primo Central は, Primo で取り込みができない情報データをあらかじめ Ex Libris 社が用意した Primo Central に取り込み, 各図書館は自館の Primo から Primo Central のインデックスを検索するというサービスである。

また参考として, オックスフォード大学図書館の Primo 事例を公開した記事が紹介された²⁾。

VI. 事例報告「AquaBrowser」

AquaBrowser は, Web ベースの Software as a Service (SaaS) 型システムで Serials Solutions 社が販売している。現在のマーケットとしては, 公共図書館が主である。基本的な機能, 検索範囲は, Primo と同様であるが, 検索結果の画面に Word Clouds という図が表示され, 関連項目(関連語, スペルのバリエーション, シソーラス, 翻訳された用語, 関連項目の検索)が目で視覚的に理解できる。AquaBrowser にも「My Discoveries」という個人用ごとのカスタマイズ機能があり, 利用者がタグ付けを行うことができる Social Network Service (SNS) 機能が備わっている。

Serials Solutions 社が提供するリンクリゾルバ機能「360Link」, 統合検索機能「360 Search」等の 360 シリーズが提供する機能との親和性が高く, その組み合わせ如何により多様な機能・情報サービスの提供が可能である。

導入事例として, アメリカの Oklahoma State University Library での利用紹介があった(図2)。

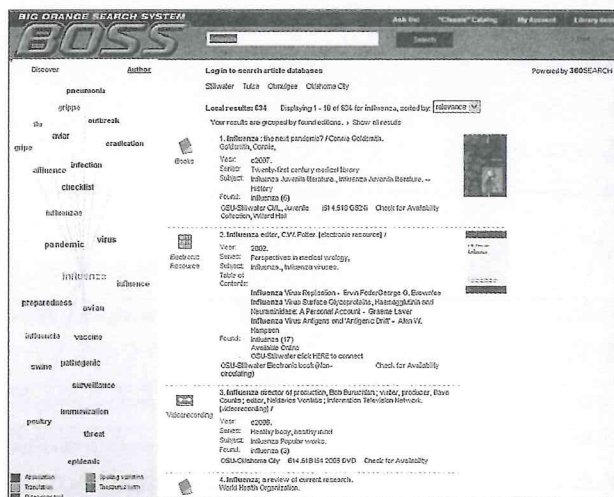


図2. AquaBrowser : Oklahoma State University Library
(<http://www.library.okstate.edu/> [accessed 2009-09-21])

また Serials Solutions 社には, 前述の Primo における Primo Central と同じサービスである Summon (サモン) と呼ばれるシステムが用意されていることが紹介された。

VII. ディスカッション

講演後, 参加者と講師 4 名による意見交換が行われた。一部を紹介する。

Q1. システム担当者の負荷はどうなるのか, どのような事前の調査が必要か。

- A1. 次世代OPACは、発展途上のシステムである。各々で導入をして何をしたいのか、どのような結果が必要かを調査してまとめることが必要である。PrimoやAquaBrowserは、既存のシステムの上に被るもので、多数のデータベースをまとめるため図書館サイドにも負担がかかり、データが大きければ負担も大きい。
- Q2. いつ導入をしたら良いか。
- A2. 次世代と売り出しても10年も経てば旧世代になってしまうため、いつどれを導入しても同じと考える。またシステムはすぐに腐るが、データは腐らないものである。
- Q3. 次世代OPACによる図書館は皆同様のデータを提供し、個々の図書館の特色が無くならないか。
- A3. 個々の図書館は、利用者に対しての見せ方を考えないといけないのではないか。OPACに合わせて図書館も変わるのが当然で、外に対するアピールが必要である。
- Q4. 出版社がベンダーに、リゾルバや「次世代OPAC」のためにデータを渡すと、電子ジャーナル価格に跳ね返ることがないか。
- A4. 仕様を公開すると規格は統一できるので、多数のものが共有できる。
- Q5. 金銭的負担はどうか。
- A5. 今の日本では導入できる図書館は少ない。

VIII. まとめ

Primoは韓国、AquaBrowserはアメリカにおいて導入数が多いと聞く。両方とも図書館の所蔵検索をすると、Amazonで検索した時のように表紙画面が表示され、何を検索しているのか、理解が追いつかない。また利用者がつけるレビューやタグも参考にできるが、日本人は、

レビューやタグをつけるケースが少ないため、アメリカや韓国等のように便利に利用されるかは疑問である。

今後の問題として、国内の場合では、各図書館がNACSIS WebcatやPORTA（国立国会図書館デジタルアーカイブポータル）にデータを出し合い、そのデータをまとめて「次世代OPAC」として利用し、世界に向けての情報資源として提供する場合、それらを統合するデータは、ユニバーサルな仕様が必要となる。

「次世代OPAC」は、OPACの代わりに導入できるのではなく、OPACや多数の情報資源を統合して、利用をする。そして利用者に合わせて図書館独自の「次世代OPAC」を作り上げていくことが理想であるが、価格面や言語面において国内での導入には時間がかかると考えられる。そこで、Project Next-L Enju等のオープンソースを利用することもひとつの手段であろう。

IX. おわりに

現在、所属機関でのOPAC導入を検討中ということもあり、興味があり参加をしたが、OPACが導入されていないと「次世代OPAC」が利用できないことが判った。図書館システムでは、Web機能を取り入れた新しいシステムが次から次に考えられ、日々進化し、便利になってゆく。図書館担当者もパソコンに使われないように勉強が必要であることを実感した研究会であった。

参考文献

- 1) 岡本真. ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG)-ブログ版 [編集日誌][OPAC] 2009-02-27 (Fri) : 次世代OPACとは何か 2008-02-27[Internet]. <http://d.hatena.ne.jp/arg/20090301/1235839256> [accessed 2009-09-21]
- 2) Search Oxford Libraries Online-Oxford University Library [Internet]. <http://solo.ouls.ox.ac.uk/> [accessed 2009-10-29]